日曜 朝の文箱 随想

愛あふれる感動の一日

門倉多仁亜

前回のこの欄で4年ぶりにドイツへ行く話をしましたが、おかげさまで10日間の旅を楽しんできました。ドイツ滞在中は天気に恵まれ、雲のない青空が広がり、照りつける太陽のおかげで気温は30度を超える暑さでした。でも日本と違ってヨーロッパは湿気がないので、日陰に入れば涼しい風が通り抜け、心地よい気候でした。

夏の間、ドイツの人々はみんな外へ繰り出して、できるだけ外での時間を楽しもうとします。私たちも夕方にフランクフルトに到着したのですが、妹に「着いたよ!」と連絡したら「じゃ〜マイン川沿いのカフェで会おうね!」と誘われ、出かけました。5分も歩けばマイン川にたどり着いて、西日が照りつける岸辺のほうへ陸橋を渡りました。夜だというのに明るく、平日でも子供連れの家族や若者同士のグループ、カップルなどが散歩したり、芝生でピクニックしたり。カフェではワインを飲みながら語り合っていました。私たちも穏やかな時間を楽しみました。

今回の旅のメインの目的は、イギリス・ロンドン郊外であるゴッドドーターの結婚式に参列することでした。当日も晴天で、広い芝生の真ん中に通路をあけて教会のように椅子が並べられ、ゲストが集まってきます。女性たちは年齢に関係なくカラフルなワンピースに帽子でおしゃれをして、若い男性たちははやりの髭をのばしたスタイルで、グルームメン(新郎の付き添いの友人たち)は正装にトップハットをかぶり、みんなリンカーン大統領にそっくりでした。

挙式は午後3時に始まって30分もしないうちに終了しました。花嫁はよっぽどうれしかったのか、ガッツポーズをしながらお婿さんと手をつないで退場。それからは芝生での団らんの時間です。新婚カップルを祝福し、久しぶりに会う友人と抱き合って再会を喜び合いました。6〜9時までが食事。芝生に続くドアは全面オープンにしてあり開放的。来ているのは友人と家族だけでゲストの間に上下関係がなく、雰囲気は終始リラックスしていました。

食事前に花嫁さんが祈りの言葉をささげたあとは、食事後にスピーチが三つだけです。新郎新婦のお父さん2人と、新郎の友人の笑いを誘う新婚さんの裏話。でも新婦の父は一番感動したようで、涙を流しながら花婿に対し「一言だけ君に言っておく。僕が最初に彼女を知り、愛した」。その後9時から夜中の12時までは生バンドの演奏でダンスパーティー。暇あるたびに新郎に、そしてまたお父さんにキスをする花嫁さんが印象に残っています。愛あふれる穏やかな雰囲気に感動した一日でした。

タイミング的にギリギリでしたが、楽しみにしていたホワイトアスパラガスも食べてきました。1回は友人宅で、もう1回は最後の晩にレストランで。とろ〜んと軟らかく、ほんのりと苦みのあるホワイトアスパラガスはやっぱり日本の山菜と似た感覚で楽しめます。どこへ行っても、その季節にしか食べられない味は格別ですね。

わが家の鹿屋の畑の旬はトマトとナスとカボチャ。カボチャは4等分に切ってタネをとり、皮を薄くむく。大きいカボチャなら横に半分に切って1㌢幅に切ります。オリーブ油を引いたフライパンでスライスを炒めます。焼き目がついたら裏返してまた少し焼く。ナイフでさして軟らかいことを確認したら、塩とコショウをふる。お皿に盛りつけてバルサミコ酢をまわしかけます。バルサミコ酢の甘みと酸味がカボチャの甘みを引き立ててくれておいしいです。

かどくら・たにあ氏　料理研究家。兵庫県生まれ。父は日本人、母はドイツ人。英国滞在中に料理製菓学校ル・コルドン・ブルーで学ぶ。食だけでなくドイツ生活の経験を踏まえたシンプルライフをテレビや雑誌で発信している。鹿屋市在住。